

宗峰妙超 著賛 十一面観音賛 (真珠庵蔵)

橋本 虚舟

はじめに

宗峰妙超の十一面観音図に著した賛を読む機会を得た。この十一面観音賛図は『重要文化財』『秘寶Ⅱ新装版 大徳寺』『水墨美術大系』『大徳寺の名宝』『大徳寺墨蹟全集』『禅林画賛』『鎌倉仏教』『日本の美術』『聖地寧波』等に収載される。『大徳寺墨蹟全集』『柳田聖山、及び『禅林画賛』『横田忠司、『鎌倉仏教』『梶谷亮治、『聖地寧波』谷口耕生の各氏によつて翻刻され、賛は読まれる。なおこの賛は『大燈国師拾遺録』に、「観音大士賛」として収める。

本報では賛の原文を翻刻し、釈文を平仄・脚韻等を考慮して分かち書きし、次いでこの賛のテーマである十一面観音、観音と普門、善財童子等に関して依拠する仏教経典、典故、背景を求め、本讚の内容の解釈を試みる。

一 十一面觀音畫贊

原文



本画像は『秘寶』新装版 大徳寺』収載の画像をスキャナーを用いて取り込み、フォトショップを使って画像の鮮明化を図り判読に用いた。

賛の原文は、画面上部に描かれている光背の周りの余白に、「男」の一字を中心に左右ほぼ対照に文字が配列され、書き込まれている。このことから考えると、すでに十一面観音が描かれている図に、字配りを計算配慮し、著賛したことが伺われる。

まず、この原文を翻刻した。「隣」「意」「細枝」等の文字が当図版からは判読し難たかったが、脚韻から「隣」と、書体から「意」と、判読し、「細枝」は画像の不鮮明の為、判読しかね、『大燈国師拾遺録』(一)「観音大士賛」に従った。釈文を記す。

《釈文》

三十三變普門詎隣个

者應數力隨意振

威神船舫忽尔

漂覆青

衫童

男

親鎮

一人握

櫓揺団恰

如勵声千倫風

怙浪静之後怙惚藏全用

身奇哉觀自在似入細枝春

唳

妙超拜贊

この釈文について、平仄、脚韻等を考慮し、分かち書きをし、下段に読み下し文を記す。

《分かち書き》

三十三變、

普門詎隣。

个者應數力、

隨意振威神。

船舫忽尔漂覆、

青衫童男親鎮。

一人握櫓揺団、

恰如勵声千倫。

風怙浪静之後、

《読み下し》

三十三に變じ、

普門隣りに詎れり。

この者、數力に應じて、

隨意に威神を振う。

船舫 忽尔に漂わし覆えさんとせば、

青衫の童男 親から鎮む。

一人にて櫓を握り搖さぶり団し、

恰かも千倫を勵声するが如し。

風怙まり浪静まりし後、

悦惚藏全用身。

悦惚こうことして全用身を蔵す。

奇哉観自在、

奇なる哉観自在、

似入細枝春。

細枝の春に入るに似たり。

咦

咦

妙超拜賛

妙超 拜賛す。

押韻は◎隣、神、鎮、身、上平声十七真韻、倫、春、上平声十八詢韻で、同用。

● 仄声

## 二 十一面観音画図

まず、此の画図に描かれている事柄について看る。画面中央に、岩盤上に蓮の花が描かれ、その上に十一面観音が立ち、頭部を三段に分ち十一面が、頂上部に仏面則ち阿弥陀が配され描かれる。左手に紅蓮花の軍持を持ち、右手に数珠をかけ、施無畏手をなし、全身瓔珞で飾られている。画面の左下隅には、善財童子とおぼしき童子が、蓮華の花弁上に蹲るように坐り、十一面観音を仰ぎ見る。十一面観音像の左足下には、青い衣を着た勇ましい出立ちの青年が、荒波に漂っている船に乗り、力強く櫓を漕ぐ。観音は童子や童男に比べて背丈は格別に大きく描かれており、衣紋や波頭等の描写には、精緻、かつ力強い線が使われている。

この画図に描かれている十一面観音、善財童子に就いて、なぜ斯様に描かれているか、理解する為に、関係する經典を読み、注釈をつける。なお、經典のテキストは『新脩大正大藏経』に拠り、筆者が訓読したも

のを併記する。

### ○十一面観音の全身像

「十一面観音神呪心經」<sup>(2)</sup>に造像の方法について次の様であり、十一面観音の姿が詳しく記されている。すなわち、十一面観音は、栴檀を刻んで、高さ一搩手半いっぢょうしゅはん即ち一尺二寸(三十六センチ)とし、左手に紅い蓮の花の軍持をもち、右臂を展ばして数珠を掛け、施無畏手をなす。像の十一面は、前の三面は慈悲相とし、左辺の三面は瞋怒相とし、右辺の三面は白牙上出相とす。後に当る一面は暴悪大笑相とし、頂上の一面は仏面像とし、頭の冠は仏身とする。観音菩薩の身は、瓔珞等で飾る。

### 【訓読】

世尊、若し此の神呪を成立せんと欲さば、应当に先ず堅好な無隙の白栴檀香を以て、刻みて観自在菩薩像を作べし。長さ一搩手半にして、左手に紅蓮花の軍持を執り、右臂を展べて以て数珠を掛け、及び施無畏手を作す。其の像十一面に作り、前に當る三面は慈悲相を作し、左辺の三面は瞋怒相を作し、右辺の三面は白牙上出相を作す。後に当る一面は暴悪大笑相を作し、頂上の一面は仏面像と作し、諸頭の冠中に皆な仏身を作る。其の観自在菩薩の身上には、瓔珞等の種種の莊嚴を具えよ。

### ○善財童子

観音と善財童子の関係は「大方廣佛華嚴經」<sup>(3)</sup>に観音に見ゆる善財童子の章があり、両者の関係をみるこ

とができる。善財童子が諸國の五十三人の菩薩を訪れ途中、光明山(普陀落山)に至り、山上を遍り、觀音菩薩に山の西で見えた。処処に流泉浴池たまきが有り、林木鬱茂していた。金剛宝座に結跏趺坐し、おおくの菩薩が恭敬、圍繞していた。大悲經を説き、普く衆生を度した。その時、觀音菩薩は善財を見て、告げてた、「善くぞ来たな、童子よ。専ら大乘を求めて衆生を摂取しなさい。深く仏法を求め、大悲を長養し一切を救いなさい。悟りに入らず、衆生のなかで、菩薩行を實踐し、衆生を救済しようとする普賢の行を、大願を成満し、一切諸仏、一切法雲を聞き、受持しなさい。」を説かれた。

【訓読】

漸漸に遊行し光明山に至り、彼の山上に登り周遍、推求し、觀世音菩薩、山の西の阿に住するを見る。処処に皆な流泉浴池有り、林木鬱茂し地草柔軟なり。金剛宝座に結跏趺坐す。無量の菩薩恭敬、圍繞す。爲めに大悲經を演説し、普く衆生を摂す。見已りて、歡喜踊躍し自ら勝う能わず。合掌、諦觀し、目暫くも瞬かず、是の如きの念を作す。善知識は則ち是れ如來、善知識は一切法雲、善知識は諸もろの功德藏、善知識は十力の妙宝、善知識は見難く遇い難く、善知識は無尽の智藏、善知識は功德山の王、善知識は一切の智門を開発示導し、能く一切を薩婆さつぱ若の海に入りて、清淨の無上菩提を究竟せしむ。時に觀世音遙かに善財を見て、告げて言く、「善くぞ来れる、童子よ。専ら大乘を求め衆生を摂取せよ。直心深心に仏法を樂おがい求め、大悲を長養し一切を救護せよ。普賢の行おに向て、清淨に一切大願を成満し、一切諸仏、一切法雲を聞き、受持せんと欲せよ。善根を増長し厭足無し。善知識しよがに順したがひ、其の教を違えず。文殊師利の智慧、功德の大海より起くる所、善根を成就し、仏の勢力、光明三昧を得て、懈怠の心を離れ専ら正法を求め常に諸ま仏に見えん。

衆悪を遠離し、諸もろの善行を修せよ。智慧成満し、淨なること虚空の如し。」

### 三 十一面観音贊

この贊が観音經の教義に基づいて、作られていることは明かであるが、観音經に依つてのみ、この贊を解釈することは困難である。そこで、各語句の依拠する經典を調べ、対応する個所を読む。

#### 〇三十三變

「観音經」〔4〕に観音が身を三十三變し衆生を度す次の段がある。「衆生が仏身で度すことができる者には、観音菩薩は仏身を現わし説法し、辟支佛身を以て度すことができる者には、辟支佛身で説法する。声聞でできるなら、声聞となり説法しよう。梵王身なら、梵王身になろう。帝釈身でよければ、帝釈身に現らわれて説法しよう。応に自在天身を以て度すことを得べき者には、即ち自在天身を現じて為に説法す。かくかように、衆生の機に應じて度し得る姿に變じ、あらゆる衆生を救わねばならぬ。」と無尽意菩薩に説いた。

#### 【訓読】

仏、無尽意菩薩に告ぐるに、「善男子よ、若し國土有りて衆生應に仏身を以て度すことを得べき者には、觀世音菩薩、即ち仏身を現わし為に説法す。應に辟支佛の身を以て度すことを得べき者には、即ち辟支佛身を現じて為に説法す。應に声聞の身を以て度すことを得べき者には、即ち声聞身を現じて為に説法す。應に



梵王の身を以つて度すことを得べき者には、即ち梵王身を現じて為に説法す。応に帝釈の身を以て度すことを得べき者には、即ち帝釈身を現じて為に説法す。応に自在天の身を以て度すことを得べき者には、即ち自在天身を現じて為に説法す。応に大自在天の身を以て度すことを得べき者には、即ち大自在天身を現じて為に説法す。応に天大將軍の身を以て度すことを得べき者には、即ち天大將軍身を現じて為に説法す。応に毘沙門の身を以て度すことを得べき者には、即ち毘沙門身を現じて為に説法す。応に小王の身を以て度すことを得べき者には、即ち小王身を現じて為に説法す。応に長者の身を以て度すことを得べき者には、即ち長者身を現じて為に説法す。応に居士の身を以て度すことを得べき者には、即ち居士身を現じて為に説法す。応に宰官の身を以て度すことを得べき者には、即ち宰官身を現じて為に説法す。応に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を以て度すことを得べき者には、即ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷身を現じて為に説法す。応に長者・居士・宰官・婆羅門・婦女の身を以て度すことを得べき者には、即ち婦女身を現じて為に説法す。応に童男・童女の身を以て度すことを得べき者には、即ち童男・童女身を現じて為に説法す。応に天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の身を以て度すことを得べき者には、即ち皆な之を現じて為に説法す。応に執金剛の身を以て度すことを得べき者には、即ち執金剛身を現じて為に説法す。無尽意よ、是れ觀世音菩薩、是の如き功德を成就して、種種の形を以て諸國土に遊して衆生を度脱せしむ。」

○觀音と普門

吉藏の「法華義疏」⑤觀世音菩薩普門品第二十五に「觀音を名と為し普門を徳と為す。故に双べて名と徳

を標す。夫れ勝人は理として名有り徳有り。是の故に双べ標して以て観音普門品と名づく」と観音・普門について十対をあげて説いている。すなわち、普門はサマンタ・ムカの漢訳で、観音の神通力を示現し衆生を救済する働きである。

### 【訓読】

初めに双標中に凡そ十対有り。

一には人法の一雙。観音を人と為し、普門を法と為す。然も人法は是れ因縁の義なり。人に非ざれば以て法を御すこと無く、法に非ざれば以て人を成すこと無し。故に前に法を御す人を明かし、後に人を成す法を弁す。人法の一雙を謂う。

二には真応の一雙、觀世音は即ち是れ法身、普門は応身を謂う。前には法身を以て機を觀じ、然る後に迹を垂れて普く応ず。真応の一雙を謂う。

三には觀音は菩薩の意業を、普門は即ち身口の二業を謂う。前には意業を以て觀察し、然る後に身に神通を現じて、口業に法を説く。内外の一雙を謂う。

四には觀音は大慈もて苦を抜すくい、普門は即ち大慈もて樂を與うを謂う。故に後に觀音の名を積し拔苦の義を明かし、普門を積し即ち樂を與う功を顯わす。所化の衆生は但だ苦有りて樂無く、能化の菩薩に大慈大悲有り。慈悲の一雙を謂う。

五には菩薩に二種の身有り。一は藥樹王身、二は如意珠王身。藥樹王身は根茎枝葉もて能く衆病を愈す。菩薩も亦た爾り。故に三業皆な能く物を濟う。如意珠王身は摩尼宝の如く能く一切の樂を與う。菩薩も亦た

爾り。其の見聞する者 益を蒙むらざる無し。觀世音の名を積し藥樹王身を嘆じ、普門の名を積し如意珠王身を明かす。故に珠藥の二王を一雙と為す。

六には觀音の名を積するに、衆生の感の義を顯わし、普門を標するに、菩薩の応の義を明かす。初の感に応無きに非ず、後の応に感無きに非ず。但だ初めに応を拏して以て感を成じ、後に則ち感を標して以て応を成ず。感応一雙を謂う。

七には觀音の名を標すは、菩薩能く衆生に世間の樂を与うを嘆じ、普門を標すは菩薩能く衆生に出世間の樂を与うを顯す。故に前文に七難を消除し二求の願滿ずを明かす。即ち是れ世間の樂と知んぬ。後に三十三身十九說法に皆な得度すと稱す。故に出世の樂を与うと知んぬ。此れ皆大判し言と為す。別相に説くに非ず。前に世樂を与え、後に出世樂を与う。此れは是れ次第の法門、世出世の一雙を謂う。

八には觀音を標するは、神通を明かし、物の音声を察するは即ち天耳通なるを以てなり。普門を題するは示現を謂う。六通の中、三は是れ神通にして示現に非ず。天耳・天眼・宿命を謂う。三は是れ神通にして亦た是れ示現なり。他心・神足・漏尽を謂う。漏尽是法を説き、神足は転変し、他心は機を知る。即ち事を以て人をして験を信ぜしむる故に示現と名く。神通と示現一雙を謂う。

九には觀音の名を標するは、密の利益を明かし、普門を標して顯の利益を明かすを謂う。後に身を現して説法すが故に顯と為し、前に身を顯して説法せずして能く物をして難を免がるが故に密益と称す。菩薩物を濟うに顯密の二義を出でず。顯密の一雙を謂う。

十には觀音を標して菩薩の名を明し、普門を題して大士の徳を顯す。謂く名徳の一雙なり。然ども此の品内の義、十双具すと雖然も、今名徳を以て正と為す。

○詎

『大廣益會玉篇』に、「至」るがある。

○数力

「雜阿含經」力品(6)に、吾が身を深く顧みる力と説く。

【訓読】

二種の力有り。何等をか二と為す。謂く、数力及び修力なり。何等をか数力と為す。謂く、聖弟子 空閑林中の樹下に、是の如き思惟を作す。身悪行は、現法・後世に悪報を受く。我若し身悪行を行ぜば、我、当に自ら悔い、他をして亦た悔いせしめん。我が大師も亦た当に悔ゆべし。我が大徳梵行も亦た当に悔ゆべし。我れ法を以て我を責めん。悪名流布し、身壞し命終り、当に悪趣泥犁中に生まん。是の如く現法にも後に報ゆ。身悪行を断ぜば、身善行を修す。身悪行の如く、口意悪行も、亦た是の如く説く。是を数力と名づく。何等をか修力と為す。若し比丘、数力に学び、聖弟子、数力成就し已らば、随つて修力を得ん。修力得已らば、修力満足せり。

○全用身

「成唯識論」(7)に自性受用変化三身を説く中で、自受用身を法身に、他受用身を応身に对应させて、次のように説いている。

【訓読】

此(受用身)に二種有り。一には自受用、謂く諸もろの如来の三無數劫に無量の福慧の資糧を修集して、起くる所の無辺真実の功德と、及び極めて円浄常遍の色身となり。相續して湛然なり。未来際を尽して恒に自ら広大の法樂を受用す。二には他受用。謂く諸もろの如来の平等智に由て、示現する微妙の淨功德身なり。純淨土に居して、十地に住する諸もろの菩薩衆の為に、大神通を現して正法輪を転じ、衆の疑網を決して、彼をして大乘の法樂を受用せしむ。此の二種を合して受用身と名づく。

○細枝春

陸凱の「贈范曄」に「聊贈一枝春」があり、戴益の「探春」に「春在枝頭已十分」がある。一枝春とはすなわち梅のことをさす。小さな一輪の梅の花が枝頭に在つて已に十分であり、この自然の営みに、観音の法身をもつて機を觀じ、普門は応身をもつて垂迹して普く示現するを看ることができる。

贈范曄 陸凱

范曄に贈る 陸凱

折花逢驛使

花を折つて驛使に逢い

寄與隴頭人

寄せ与う 隴頭の人に

江南無所有

江南には 有る所無し

聊贈一枝春

聊か贈る 一枝の春

探春 戴益

春を探る 戴益

尽日尋春不見春

尽日春を尋ねて春を見ず

杖藜踏破幾重雲

杖藜踏破す幾重の雲

归来試把梅梢看

帰り来たつて試みに梅梢を看れば

春在枝頭已十分

春は枝頭に在つて已に十分

○宗峰妙超

「大燈國師行狀」(8)に、大燈國師宗峰妙超と密教系の十一面觀音の關係を知る手がかりがみえる。則ち十一歳にして書写山の戒信律師に仕え十分な天台の学業を学び、その後、出家以前に、不立文字、直指单伝の宗に入るに如かんと發心して、禪宗に入る。後に鎌倉後期の天台宗の僧で、儒家である洗心子玄慧法印との法戦に勝利し、弟子の礼を執らしめた事から判断すれば、妙超は天台の關して高い見識を持つていたであらう。天台にたいする造詣の深さを知らしめられる逸話である。

【訓読】

師諱は妙超、宗峰は其の号なり。播州の揖西県に生る。紀氏の子たり。父母本州の書写山、如意輪觀音に侍り、母夢みるらく、一僧手に白花の五葉開くを携さえて之を与うに、妊有り。妊みて後寐むるが如くにして寤めず。其の誕るる時に至るも、熟睡して知らず。保母俄に呱呱一声を聞き、往きて之を見るに、未だ澡浴せざるして肌体瑩潔なり。克く岐ぎに克く疑ぎに、頂骨聳え立ち、伏犀額を挿み、目光人を射る。面前の人に

随つて能く顔目を転ず。五歳の時、人の剛に刀を発せるを見て云く、何の為にか作す。云く、快利ならんと貴<sup>ほつ</sup>図す。云く、快利なざる処に快利有り。你還た知るや。其の人測るなし。師呵呵大笑す。事に触れて言を以て人を折挫せしむ。若し此<sup>こゝ</sup>に親族の諫めて之を住<sup>とど</sup>めんと欲す者有らば、棒を拈じて便ち打つ。郷党称して神童と為す。十有一歳にして師、書写山の戒信律師に事う。毎に静処に屏坐して、志俗塵を厭う。經書目を過ぐれば誦を成す。一日慨然として云く、仮使い九流三蔵、百家異道の書を究むも、争でか不立文字、直指単伝の宗に入るに如かん。未だ剃染せざるに発足して、京城並びに相州に至り、諸尊宿に参問す。

〔中略〕

城北の紫野に徙居し、仏殿を立てず、唯だ法堂を樹つのみ。洗心子玄慧法印、儒者九人と偕に朝奏し、禪宗を破さんと欲す。禪宗に若し奇特の事有らば、吾が儕豈に敢て諸儒を徴詰せん。諸方の禪將、意に当る者有る無し。諸儒師の名を聞きて、特に來りて問うて云く、禪宗の手段如何ん。師云く、虚偽を以て真実を示さん。儒云く、聖人に虚言有りや。師云く、有り。云く、既に是れ聖人、甚の虚言か有る。師云く、見ずや、孟子に之有り。象已に舜を殺すと謂<sup>い</sup>了えて宮に入り、舜の床に在りて琴するを見る。舜象の來るを見て喜ぶ。豈に是れ虚偽にあらざらんや。其の間、激揚鏗鏘、問答罷つて、儒却た師に問て云く、畢竟如何んが此の義を決断し去らん。師云く、舜却て象を殺し了る。諸儒皆な稽顙して弟子の礼を執る。就中洗心子、入室参禅し、造詣浅からず。崇信の至りに勝えず。

## 四 贊の解釈

本贊は密教の教義を踏まえ書かれているに、これ等の經典及び語録をふまえて、十一面觀音贊の意の解釈を試みた。

觀音菩薩は衆生が名号を称えるのを聞き取りになれば、その機に應じて三十三身に身を変じて、すぐさま衆生を濟度する為にお出ましになる。

そのありさまは、法華義疏に説くがごとく、觀音は人であり、普門は法である。人と法は因縁のことであり切つても切り離すことが出来ないもの。觀音は正に法身であり、普門はこれ応身。即ち觀音の本體が機縁に應じて衆生を濟度する為に変化して示現してきたもう。觀音は心の働きをなし、普門は口や身体の働きをなす。觀音は心の働きにより衆生をよく見、普門は身体に神通を示現し、口によつて法を説き衆生を濟度する。觀音は大悲を以て衆生の苦を取りのぞき、普門は大慈を以て衆生に樂を与える。斯くかように、觀音と普門の間には十の密接な連携をなすうちに衆生濟度を行ずる。法華經普門品はかく説いている。

正にこの菩薩は、衆生を濟度するに、その者の思慮の深さに應じて、思うがままに、方便を駆使し、威神力を奮う。

十一面觀音の方便面である瞋面が姿を示現し、心のよこしまな衆生を導く為に、突如として大海原に船を漂わし覆さんと、逆境に追い込むがごとくの方便を使うかと思えば、衆生が戒心したと見るや、青い偏衫を着た童男に変化し、自らが荒波の海を静めんと出づる。



ただ一人で櫓を握り、櫓を揺らし操りながら団と叫び船を進める。その声は、恰も千人の輩の漕ぎ手を叱咤激励するが如し。

やがて風は凧ぎ、荒波は静まりかえれば、それまでに示現していた菩薩の全ての変化身は何処ともなく、忽ちのうちに隠れてしまう。

ああ、なんと恐ろしきほどの素晴らしき働きある観自在よ。

今、突如隠れてしまった観音菩薩の法身が、まるであの細い梅の枝に入り込んだかの如く、戴益が梅の梢に見た一輪の春、その様な小さな蕾の姿で、普門はそこに示現している。

唳

妙超 拜賛す。

## まとめ

この十一面観音賛の画図は、十一面観音、善財童子、童男、荒海をテーマとして描かれる。十一面観音は「十一面神呪心經」に述べられるが如く、造像の方法にしたがつて描かれている。頭部には十面の方便面を三段に配し、真面とが描かれ、左手に紅蓮花の軍持を持ち、右手には数珠を掛け施無畏手をなす。全身は瓔珞で飾られる。善財童子は「大方廣佛華嚴經」入法界品の記述の如く、補陀落山にて観音菩薩に見える。童男、荒海は「妙法蓮華經」観世音菩薩普門品第二十五の述べるところである。観音菩薩像が善財童子、童男に比して随分に大きく描かれているが、「機に応じて観音像の身丈が決められる」ことによる。

画賛は『大徳寺』<sup>(9)</sup>、『大徳寺墨蹟全集』<sup>(10)</sup>、『禪林画賛』<sup>(11)</sup>等に云うように、すでに完成していた十一面観音図に、のちに光背の上の余白に賛が書き加えられたものと考えられるが、バランスよく文字の配置を計算して、観世音菩薩普門品に説かれていた教義にしたがつて、難解な賛が書き入れたことであろう。

宗峰妙超は大灯国師行状にみるように、「父母本州の書写山、如意輪観音に禱り」、天台の下に、「若し女人有りて、設し男を求めんと欲さば、観世音菩薩を礼拝供養せば、便ち福德智慧の男生る」と観世音普門品にあるように、靈験あらたかにして、この世に生を受けてきた。「十有一歳にして師書写山の戒信律師に事え」ながら、「一日慨然として云く、仮使たとい九流三蔵、百家異道の書を究むも、争か不立文字、直指単傳の宗に入るにしかず。未だ剌染せざるに発足して、京城並びに相州に至り、諸尊宿に参問す」と禪宗に改める。

後に「城北の紫野に徒居し、仏殿を立てず、唯だ法堂を樹つのみ」のところに正中十二年（一三三五）に天台僧の「洗心子玄慧法印、儒者九人と偕に朝奏し、禪宗を破さんと」した正中の宗論において、宗峰妙超に敗れ、弟子の礼を取ることとなった。

これ等の事柄から、宗峰妙超はいかに天台に深く関わりがあつたか、また、台教に粹しく、法華経を深く理解していたことであろうかが推し量ることができる。その知識を以て、この密教に深くかかわりのある十一面観音に著賛されたことであろう。『法華経』観世音普門品の教義が、まさにこの賛にうたわれている。

禅画といわれる画図に著賛する場合、いわゆる禅語という言葉がしばしば使われる。本賛には使われず、経典の文字のみで賛が作られていることに少しく奇異を感じる。

## おわりに

贊、偈頌等を読むにあつたつて、四声等が理解しえぬ筆者にとつて、句読をうつことにしばしば困難を覚える。そこで、平仄、押韻を調べることにより、また対句・単対、隔句対等を考慮し、その難を避けている。西尾賢隆氏は、拈香、香語、鐘銘、祭文、法語、上堂および頂相贊等々を「駢賦」として読む<sup>(12)</sup>。そこで少しく駢賦なるものに就いて調べた。

駢賦については、林田慎之助氏は、「…賦と称せられる文体であつた。かぎりなく韻文にちかい散文といおうか、脚韻をふみ、対句構成に工夫をこらした華麗な長編散文詩ともいえる文体であつた。」<sup>(13)</sup>がみえる。小川環樹・西田太一郎氏は、「…六朝時代の詩がしだいに句末の平仄をととのえ、規律が嚴重になるに伴ない、賦もその影響をうけて規律化し、唐代に入つていわゆる律賦(駢賦)として規律が定まるに對して、」<sup>(14)</sup>とあり、鈴木虎雄氏は、賦を時代的に分類し、騷賦、辭賦、駢賦(俳賦)、律賦、文賦、股文賦(清賦)等に分類し、時代に從つて解釈をしている。その文中で、駢賦を「この時代の賦は對句と音調とを整ふることに於いて特色を表はす。」とし「對句を頻繁に用ゐ、又其の工麗ならんことを求めたり。」「律賦なる者は実に音律諧協・對偶精切を尙ぶものなり。單にこの點よりすれば俳賦と同性質を有す。」<sup>(15)</sup>とする。同様に、趙俊波氏も騷体賦、駢賦、律賦と分類しているが<sup>(16)</sup>、それぞれの文体に就いての、明確な定義はなされていない。

一方、小川環樹氏は「もう一つ、駢文に似ているが、脚韻をふむ点で詩とみるべきものに「賦」がある。賦の句形は長短さまざまであるが、対句を用いることが多い場合は、律賦あるいは駢賦とよばれ、句の平仄

の交替の規則は律詩および駢文とほぼ同様である。全然対句を用いない賦もあって、それは律賦と区分して「古賦」とよばれる。蘇軾の「赤壁の賦」はこれである。ただ脚韻をかならず用いる点で、駢文とは別のジャンルになり、韻文に属する。陶淵明の「帰去来の辞」のごときは、実は古賦の一体と言つてよく、やはり韻がふんである。これらを合わせて「辞賦（詞賦）」とよぶことがある。<sup>〔註〕</sup>としており、この十一面観音賛も又、「古賦」に属する一体であることがわかった。

この文体を理解することによつて、少しく賛の内容を解釈し得る詩文がえられたものと考ええる。

## 謝辞

この賛を読むに際し、十二年の永きに互り、語録、賛、祭文等のご指導を賜つた元花園大学西尾賢隆教授に、この賛を読む機会を下さつた国際禅学研究所元副所長芳澤勝弘教授に、『法華玄義』解説のご指導を賜つた元花園大学小林圓照教授に、校正のご指導を賜つた花園大学衣川賢次教授に、また、画像の解析にご助力戴いた国際禅学研究所員富増健太郎氏に末尾ながら感謝の意を表します。



注

- (1) 『大德寺禪語錄集成』「大燈國師拾遺錄」 觀音大士贊 法藏館 平成元年三月二十二日
- (2) 「十一面神呪心經」 大正 卷二十一 152a
- (3) 「大方廣佛華嚴經」 卷第五十一 入法界品第三十四之八 大正 卷九 718a
- (4) 「妙法蓮華經」 觀世音菩薩普門品第二十五 大正 卷九 56c
- (5) 「法華義疏」 卷第十一 觀世音菩薩普門品第二十五 大正 卷三十四 623c
- (6) 「雜阿含經」 卷第二十六 (六六一) 力品 大正 卷十一 184a
- (7) 「成唯識論」 卷第十一 二十頌 大正 卷三十一 57c
- (8) 「龍寶開山特賜興禪大燈高照正燈國師語錄」 大燈國師 行狀 大正 卷八十一 222b
- (9) 田山方南 著 『秘寶』新裝版 大德寺』 講談社 昭和五十一年十一月三十日 三二七頁
- (10) 『大德寺墨蹟全集』 第一卷 毎日新聞社 昭和五十九年十一月三十日 九五頁
- (11) 島田修二郎・入矢義高監修 『禪林面贊』 毎日新聞社 昭和六十二年十月十日 三九頁
- (12) 西尾賢隆 『中世禪僧の墨蹟と日中交流』 吉川弘文館 二〇一一年二月十日 一一三・一一六・一一七・一二二・一四七・一八〇・一九二・二六二・二七三・三〇八・三二六頁
- (13) 林田慎之助 『史記・貨殖列伝を読み解く』 講談社 二〇〇七年七月十日 一六三頁
- (14) 小川環樹・西田太一郎 『漢文入門』 岩波全書 一九六五年二月十日 二九〇頁
- (15) 鈴木虎雄 『賦史大要』 富山房 昭和十一年四月十五日 九九頁
- (16) 趙俊波 『中晚唐賦文体研究』 中国社会科学出版社 二〇〇六年八月 五頁
- (17) 小川環樹 『小川環樹著作集第一卷』 筑摩書房 一九九七年一月二十日 三二頁

参考文献

- 「十一面神呪心經」 新国訳大藏經 十二 密教部二  
「十一面神呪心經義疏」 大正新脩大藏經 卷三十九 1004b  
「法華義疏」 国訳一切經 和漢撰述 經疏部 三  
「法華玄論」 大正新脩大藏經 卷三十四 447a  
『法華玄論』 卷第十天和三年龍集癸亥孟夏吉辰 中野宗左衛門 柳川武兵衛  
『大方廣佛華嚴經』 卷第五十一 昭和新纂國譯大藏經 東方書院  
平野宗淨編『大燈國師語錄』 思文閣 昭和六十一年十月二十二日  
『大燈錄』 國譯禪學大成 第二十二卷 二松堂書店 昭和五年九月二十日  
『重要文化財』 7 絵画 I 毎日新聞社 昭和四十八年一月三十日  
『水墨美術大系』 第五卷 講談社 昭和五十四年三月二十日  
『大徳寺の名宝』 編集 京都国立博物館 昭和六十年四月九日発行  
『鎌倉仏教』 編集・発行 奈良国立博物館 平成五年四月二十三日  
宮島新一『日本の美術』 70336 至文堂 一九九四年五月十五日  
『聖地寧波』 編集・発行 奈良国立博物館 平成二十一年七月十八日  
坂本幸男・岩本裕記注『法華經』 岩波文庫 二〇〇六年八月四日  
平井俊榮『統法華玄論の注釈的研究』 春秋社 昭和六十二年二月二十八日  
太田久紀編注『成唯識論』 中山書房仏書林 平成五年八月